

令和3年度第1回千葉市新基本計画審議会スマートシティ部会 議事要旨

1 日 時 令和3年5月31日（月）14時30分～16時15分

2 場 所 Web開催（千葉市議会棟第2委員会室）

3 参加者 <<委員>>5名（五十音順）

越塚 登委員、高梨 園子委員、南雲 岳彦委員、沼尾 波子委員、森川 博之委員

<<事務局>>7名

神崎総合政策局長、勝瀬未来都市戦略部長、鈴木スマートシティ推進課長、吉野国家戦略特区推進課長、山田総務局次長、安部情報経営部長、上原業務改革推進課長

4 議 題

- (1) 令和3年度スマートシティ部会の審議事項（案）について
- (2) 「（仮称）千葉市スマートシティ推進ビジョン」について
- (3) その他

5 議事概要

- (1) 令和3年度スマートシティ部会の審議事項（案）について
令和3年度スマートシティ部会の審議事項（案）について、事務局より説明を行った。
- (2) 「（仮称）千葉市スマートシティ推進ビジョン」について
「（仮称）千葉市スマートシティ推進ビジョン」について、事務局より説明を行い、委員との意見交換を行った。
- (3) その他
次回の日程について、事務局より連絡を行った。

6 会議経過

～以下、議事要旨～

議題（1）令和3年度スマートシティ部会の審議事項（案）について

（事務局）令和3年度スマートシティ部会の審議事項（案）について、資料1をもとに、説明を行った。

議題（1）「（仮称）千葉市スマートシティ推進ビジョン」について

（事務局）「（仮称）千葉市スマートシティ推進ビジョン」について、資料2、資料3、資料4をもとに、説明を行った。

<意見交換>

森川 部会長 南雲 委員	資料4の論点1の策定趣旨について、ご意見を伺いたい。 副題に「地域と共に」とあるが、スマートシティの世界では「市民と共に」なので、市民意識をもっと出さないと響かないのではないかと。市民中心というところは出したほうが良い。資料4の4ページ、策定趣旨の枠組みはそのとおりだとは思いますが粗く見える。どこの市とも同じように見える。国レベルで掲げるところなるが、これが千葉市だと、きつともっと具体的になっていくと思う。データをもって現状を分析すると、この都市の強みとか弱みとか、色々な課題が具体的に数字も含めて出てくると思う。これがないまま言葉だけやると、こうになってしまうので、市民の人からすると、ひよっとすると何となく日本全体の白書を読んでいるような気分になってしまうと思う。なので、千葉市ならではの感というものがある初めて人々の心に近づくところについてはもう少し意識したほうが良い。
越塚 副部長	確かに千葉らしさというところからもうちょっと絞っても良いという感じはする。もう少しキャラを立たせたほうが良いかもしれない。
森川 部会長	策定趣旨の「①本市を取り巻く重要な社会変化」はもっとブレイクダウンして、千葉市ならではの問題とか、それをとにかくリストアップして、テクノロジー、デジタルの進展、Society5.0は別のところに書いても良い。
スマートシティ推進課長	骨子案のときには策定趣旨ページになかなかどり着かないという御意見をいただいていた。最初に策定趣旨を1ページで簡潔にお伝えをして、それ以降、4ページから策定の背景ということで、重要な社会変化を後から説明しているという構成にしている。
越塚 副部長	今の趣旨だとすると、ここの1ページ目で与えるべきことは危機感かバラ色の未来のどちらかではないか。インパクトがあったほうが良い。
沼尾 委員	次の5ページ目のスライドを見たときに、なぜビジョンを策定するのかということが書かれていて、1つは重要な社会変化、2つ目がテクノロジー・ICTで、その次が従来の行政主導から地域の多様なステークホルダーと共にまちづくりを行うと、ファクターが3つ入っている。恐らくここで言うテクノロジーも入れることで、地域の多様なステークホルダーと共にまちづくりを行うところの参加や協働みたいなのところに面白さというのがあるのだと思うが、これを見た市民の方たちがどういうふうに参加できるようなスマートシティになっていくのかということももう少し見える化してくると自分事としてイメージできると思う。一方、「②これまでの取組みによる成果」というところが、多様な主体との連携で他人事になってしまっているのだから、地域なのか、市民なのか、企業なのかの参加とか主体性というところがもう少し示されると、このスマートということの意味がクリアになるのかなと思う。
南雲 委員	千葉市はどんな都市なのかという定義が必要で、その中に強みとか弱みがあって、強いところをさらに伸ばすのか、それから弱いところはどうか補っていくのかということも、千葉市のスマートシティは何々スマートシティという定義めいたものが出てくると思う。「スマートシティ」という言葉は使わないで資料を1回作ってほしい。何シティなのかという言葉をたどり着く努力を1回やらないと、「スマートシティ」という言葉があまりにも便利なので、それを使ってぼやけてしまう可能性がある。
森川 部会長 南雲 委員	次に、論点2についてご意見を伺いたい。 ここも「スマート」という言葉を使うのをやめたほうが良い。「スマート」と言った

- 途端にアイデンティティがなくなっている気がする。資料4のスライド8枚目の図は中心に市民を入れなければいけない。スマートシティの中心は市民で、市民にとって、周りに何かスマートな要素が来るといふ図にたどり着かなきゃいけない。目指すスマートシティの実現というところが市民。それをどうテクノロジーがサポートするのか、それがどう価値を生み出していくのかということにたどり着かなければならない。
- 森川 部会長 資料4のスライド7枚目の千葉市が目指すスマートシティ」は市民が作り上げていくというニュアンスがあると良い。
- 南雲 委員 カメラを設計する会社のことで考えた場合、メーカーは、シャッタースピードはどのくらいかという機能をデザインするが、ユーザーからすると、シャッタースピードが速いほうがいいのは、自分の目の前を走り抜けていく息子の姿をきちんと写真に撮りたいからだというニーズがあるからであって、目指すべき価値があるということに1回到達できないと「スマート」という言葉が乱立してしまうという事態になる。何が価値なのか、何を皆さんと共有したいのかということにたどり着いてスマートに戻ってくるという順番をやるのがとても重要。
- 越塚 副部長 取組例をみると、世の中で話題になっていることが意外と入っていないような気がする。介護でいうと、暮らしではなく働き方に含まれている。学びがスマートについても、誰一人取り残さないというのも良いが、具体的な取組はぼやけている。
- 沼尾 委員 資料4のスライド7ページについて、「資源を賢く有効に」というのは効率化の議論をしているように読めてしまう。確かに便利なのは良いかもしれないけれども、むしろ多様な価値観、多様な選択肢があって、例えば不自由とか不便なのを望むようなケースというのもあるかもしれない、社会資源の最適化と言ってしまうと良いのだろうか。最適と言うと解が1つに定まってしまうような印象があり、多様なものがそこに存在できながら必要に応じてつながりを持って、それぞれが自己実現できるという場があることの豊かさということをもっと打ち出したほうが良いと思う。
- 南雲 委員 そういったことは「最大多様性の最大幸福」という言い方をされる。色々な人がそれぞれの在り方のまま自分の幸せを追求できる
- 南雲 委員 コロナの影響により、健康とか生命という言葉が随分大きくなってきた。安全・安心と同じぐらい重要になってきたのは、健康で生命を維持できるということの大切さ。そこを押さえた上で、あとは自分なりの人生を送れるという最大多様性みたいな話があって、最後に潤いとか、思いやりとか、そういう人間的な言葉が出てくる。データの社会というどうしても冷たく聞こえるが、潤いとか思いやりという要素が入っていないと市民の心に響かない。
- 森川 部会長 皆さまの御意見を伺って思ったが、千葉市が目指すスマートシティとして、行政が与えるものではなく、市民が起点となって新しいまちをつくっていくというもの。
- 越塚 副部長 先ほどの南雲委員の「スマート」を取ったほうが良いという話に集約されるが、目指す姿がきれい過ぎており、生活の場面で解決したいことはベタな感じがしている。何でそれが出てこないのかなと思ったら、スマートという言葉を使っているため、スマートという言葉に合うような目指す姿しかない。
- 森川 部会長 スマートシティといわれると、自分に関係ないと感じてしまう。
- 越塚 副部長 あと、千葉らしさというのが、具体的にないような感じする。良いところと課題の両方があると思うが。
- 南雲 委員 スマートシティ・インスティテュートでは、「リバビリティー・インディケータ」と

いうものを全国の都市に向けて無料で開放しているが、千葉市を見ると2つ特徴がある。1つは、雇用に対するニーズを満たせていない。働きたい人たちがいっぱいいるが、必ずしもそれに供給が追いついていないという数字が出ている。もう1つは、居住空間が千葉県の中であまり高くない。今、特にコロナで都心から人がだんだん移住してきている中、千葉市は人気エリア。みんな近郊に移住する。だから、雇用と人口が増えていくというチャンスなので、キャプチャーする方向にうまくベクトルを持っていけると、とても良い。

高 梨 委 員 人口は今がピークでこれから下がるので、南雲委員のご指摘はキーポイントになる。それから、市民が中心という話があったが、有効なのか便利なのかという部分は人によっていろいろと考えが分かれると思うので、決めつけずに考えていく必要がある。

越 塚 副 部 会 長 人口についてお聞きしたいが、自然減は仕方ないが、流入、流出を見るとコロナで変化はあるか。神奈川などでは、流入と流出を比較すると明らかに流入が増えてきて、流入が流出を上回っていると聞いている。千葉もそうだとすると、今生かすべきチャンスでもあるなと思う。

総 合 政 策 局 長 手元に細かな資料はないが、コロナの影響により、東京都との人口の関係については明確に構造変化が起こっていると捉えている。千葉市の豊かな自然と暮らしやすさを捉えて、人口減を食い止めていくというところの施策も少し手厚くしながら考えていかなければいけないと考えている。あと、先ほど議論があった、スマートの概念をどうするかといったところについては、特に今、基本計画の改定を併せて行っているところであり、その中の議論とすると、千葉市をどういうまちにするかという1つのキーワードとして、人や企業が集まる魅力あふれるようなまちにしていきたい。あともう1つは、一人一人が自分らしく活躍して、人と人がうまくつながっていくようなまちをつくっていききたいといった議論がある。

南 雲 委 員 人口のデータ、1月までのものを見ているが、コロナが始まってからの半年間で千葉市はネットの転入で1,900人ぐらい増えている。関東近県だと、一番増えているのがさいたま市。4,000人以上増えている。横浜も増えているが、それでも1,100人とか1,200人ぐらい。千葉市は人気。

森 川 部 会 長 南雲委員はどの資料をご覧か。

南 雲 委 員 住民基本台帳人口移動報告。

森 川 部 会 長 後ほど確認したい。次に、論点3-1に関してご意見をいただきたい。取組として別出しにして見せていくスタイルが適切かどうか。

南 雲 委 員 良いと思うが、このような計画をつくるときは、上からビジョンを作って1回下に落としとしてみて、KPIまで作ったとき、もう1回上に戻るといった回転をやらないとリアルにならず、何かつながらないものになってしまう。それを担保した上で出来上がりは2冊ということは問題ないと思う。プロセスのデザインをしっかりやらなければいけない。

森 川 部 会 長 取組項目みたいなものがある程度明らかになってきた段階で、目的とか、そちらにフィードバックをかけていくという感じか。

南 雲 委 員 そのとおり。KPIだけ先にばらばらとたくさん作って、それを実行してもビジョンにつながらないというのはよくあるパターン。どうして計っているのか、だんだん分からなくなっていく。一番上の目指す姿がしっかりしていて、それをロジックツリーで分解していくと、しっかりしたKPIにたどり着くので、逆に言うと、KPIが実行され

ていくと、ロジック定義は下から上に上がっていったら、ちゃんとビジョンが達成できるといふところを担保すること。これはやっぱり上から下、下から上という運動がないとできない。

- 森川 部会長 次は、論点3-1、3-3についてご意見を伺いたい。
- 南雲 委員 指標はテクニックが必要。オープンデータみたいなもので取れる客観的な指標と、市民に聞く主観的なアンケートという両方がないと全体像が分からない。客観的な指標と主観的な指標のずれが発生するものは結構ある。浜松市は交通事故が日本で一番多いが、それに慣れてしまっていて、主観的な指標では出てこない。客観と主観で、もしアンケートも取るつもりでいるのであるならば、客観で取れるデータと、それを主観から見たとき、どうなのかというペアリング、これを意識したデザインをやっておかないと、後で主観と客観がマッチングできなくなる。それから、進捗度を計るためのKPIでアウトカムを見るというのはまず最初にやらなければならないが、進捗自体はマイルストーンになっていくのでプロセスを計ることになる。ちゃんと計画どおり進んで、プロジェクトがマネジメントできているかどうかというのを見るためのマイルストーン系の何%進捗しているみたいな、結果は別に主観と客観で見るといふデザインはうまくやらないと、路傍が多い割に実らない。
- 越塚 副部長 評価や指標を市でやるとお手盛りという感じが拭えなくて、市民中心と言いながら、最後、評価するとき、市民は蚊帳の外かという話がある。単に市で指標を作って、市で調査して合っているということだと、市民インボルブメントという感じはしない。南雲委員にお聞きしたいが、市民が評価に参画するような、良い方法はあるか。
- 南雲 委員 指標をつくる時に、市民のウェルビーイングを計るグループと、それから別カテゴリで、政策がうまくいっているのかを計るグループの2つがある。前者は市民が主体になった指標が、後者は市役所のやっていることが計画どおりできているかという客観的なものがほとんどになる。指標が出た後にワークショップをやるようなPDCAのサイクルを持っていないと、誰も見てくれない、ただの数字の固まりになってしまう。様々な都市でアーバンデザインセンターやスマートシティ推進協議会のようなものがあるが、そこでディスカッションする場を定期的を持っていかなければならない。あと、市の政策評価はアカウントビリティーを取れるようにしておかないと、計ったけれども、誰もその責任を取れないということになる。誰の責任かがある程度分からないといけない。
- 森川 部会長 事務局への質問になるが、指標というのは何に対する指標か。
- スマートシティ推進課長 何に対するということであれば、目指す姿というものが達成できるかが一番大きいところだと思う。恐らくアンケートを取る内容というのは、指標とはまた別に現状値の把握とか、色々なものがあると思うが、その中からスマートシティ推進ビジョンの内容が達成できるかどうかという指標を何に設定するかというところで、各事業の指標というものとは違うと認識している。
- 森川 部会長 全体の指標のようなものか。
- スマートシティ推進課長 まずは、それがあってだと考えている。スマートシティ推進ビジョンを掲げているので、それが5年後、10年後、目指す姿に近づいているのかが分かるようなものが何かないかと考えている。
- 森川 部会長 全体の指標という、資料4のスライド19枚目がそうだと思うが、これは意味があるのだろうか。全体の指標であれば、あえて作らなくても良いのではないかと。

南 雲 委 員 先ほど申し上げたように、上からいって下からいって、また戻ってくるというものをやる上で、全体はあるが、それを使って下に降りていったら分野ごとに何ができればいいのかということについての KPI をつくらなければいけない。下のほうできてないと、上のほうだけできたって、何ができたか、よく分からないという話になる。サーベイやアンケートは具体的であればあるほど価値があり、抽象的であるほど価値がない。

沼 尾 委 員 市民が、千葉市はどういうことに取り組もうとしているのかと思って見ると、行政の担当職員が施策に落として事業化して予算をつける時の確認のためにやるのかということでは取扱いが変わってくる。市民が求めるまちの形というのをつくっていく上で話合いの仕組み、例えば ICT を利用できるような環境やプラットフォームを作り、民間の人たちが色々な仕掛けの中で活動し、最終的に目標が達成できたかできないかをアウトカム指標で評価するという話と、職員の方たちがこの項目に従って、どこまで事業をやったかを見ていくというのでは、指標の作り方というのも変わってくると思う。市ではどのようにイメージしているのか。両方でやろうと思っているのか。そこを切り分けて考えることが、先ほど南雲委員が仰られたことと関わってくる。

スマートシティ推進課長 本日いただいた御意見でロジックツリーというものがあり、目指す姿というものを構造化して、それぞれがというものとこの KPI の話というのも深く関わると認識したので、併せてこの指標についても整理させていただきたい。

沼 尾 委 員 そこはかなり重要だと思っている。例えば具体的にこのビジョンを達成するためにどういう施策や事業をつくっていくのかというプロセスを行政主導で進めるのと、多様な主体が色々な議論をしながら作るという場合、言い換えれば行政はプラットフォームを整え、そこで具体的にどういうアクションを起こしていくのかについては、色々なステークホルダーが連携をしながら考えていくところでビジョンを設定するという話とでは建てつけが少し変わってくるという印象がある。そこが混在してしまうと、役所のほうで全部計画を作るという話になるのではないかと心配している。

スマートシティ推進課長 ビジョンと取組項目を分けたところの整理として、ビジョンは、千葉市が目指すものやその仕組みまでを示すものということで、千葉市の仕組みとしても、スマートシティを実現するのは、地域ごとに住民の皆さんと一緒に作っていく、行政主導ではないというところがあると思っている。指標についても、具体的な取組みの KPI というものまでいって戻ってくるというよりは、先ほど整理した取組みの方向性の積み上げ、ロジックツリーの中で指標を作っていくものと考えている。

南 雲 委 員 スマートシティは、最終的に市民のウェルビーイングを目指すためにやるべき行動で、単なる道具。そこを実行する方法として3つあり、まさによく言う自助、共助、公助の3つをどう組み合わせるかということにかかっている。市役所が主体にやれるのは公助のところ、比較的デジタルガバメントに寄っている。自動運転なんかは民間企業がやったりするが、ここは自助。それから NPO や社団法人がやる世界、シビック系のところは共助。スマートシティ総体として何をを目指すのかということからまず考えた上で、誰がステークホルダーなのか。自助、共助、公助にまたがるスペクトラムの中でどういうステークホルダーがいるのか、どの KPI を共有すべきなのか。それを話し合う場としてアーバンデザインセンターなのか、スマートシティ推進協議会なのか。何かを設定されていて、定例性をもって PDCA が回っていくと。そのデザインの中で KPI は決まってくる。それがあから回転するのでビジョンも洗練されていくし、

行動も軌道修正が図れるようになる。この全体像の設計をどこかで持たないといけない。

スマートシティ推進課長 構造化や指標の設定などたくさんの御意見をいただいたので、整理をして次回ご提案できるようにしたいと思っている。

森川 部 会 長 多様性のある人たちに入ってもらおうワークショップや会議などを何回やるということも言っても良いと思っている。やったから何なのかということもあるが、色々な人たちを巻き込んでいるというのがメッセージになるような感じもする。

高 梨 委 員 多様性のあるワークショップをやることは非常に良いことだと思う。それが市民中心になる。行政の仕掛けではなくて、自分たちのまちづくりという形で皆さんが積極的に活動できる場、環境をつくることになるのではないかと思う。

森川 部 会 長 次に、論点4について、ご意見を伺いたい。

越塚 副 部 会 長 千葉市が目指すスマートシティとして3行あるが、ビジョンの場合は1行が良い。資料2のスライド11、12、13、14を見ると、そこに出てくる言葉と、その次の原則とか視点とちょっと一致してないので混乱している感じがする。それでも13ページ、14ページを見ても、説明が長い割に原則といった一言は、単に単語が出ているだけであまりメッセージ性がなかったりとか、項目が上がっているだけだから、ミッションのほうでもうちょっと詳しく書くところでも1行の中にメッセージを込めて、それを5行ぐらいで書くという感じのほう表現方法としては訴求するのかなと思う。あと、テクノロジーは裏に隠れるのがテクノロジーのあるべき姿なので、意識せずにテクノロジーを使っているというふうにして行きたい。

森川 部 会 長 「誰もがあまり意識することなく自然にテクノロジーの恩恵を受けられること」というのは良いと思う。「自然にテクノロジーを使えて」となると、使えてということは、テクノロジーの恩恵を受けると言われると、自然とすっと入っていくかもしれない。

沼 尾 委 員 さっき申し上げたことと重なるが、この文章を読むと、便利な機能をいっぱい作って整えていって利便性を高めるように見える。多様な個というのがそれぞれ自立していて、それぞれの人たちが自己実現しようと思ったときに色々ところにアクセスをして、つながり、ネットワークを、手を広げたときにいろいろ情報を取ったり、自己実現をしながら新しいものがクリエーション、創造されていくということがアウトカムのゴールとしてあって、そういうところの自己決定とか自己実現をしながら多様なものが共存して何か生まれるというまちをつくるためにテクノロジーだったり、みんなが話し合えるようなプラットフォームというか、場があったりということがトータルにあるのがスマートということなのかなというイメージを私は漠然と思っている。それが機能のところだけフォーカスされていて、これを行政のほうで事業化するのでよしくと読めてしまうところももったいない。どんなまちなのかというところがうまく表現できるといいと思う。この23ページはある意味分かりやすく、それぞれのいろいろなサービスの分野でテクノロジーを入れていくということを書かれているが、それを使って何がしたいのかということをもうちょっと明確に打ち出すような絵が必要。

森川 部 会 長 次に、論点5について、ご意見を伺いたい。

南 雲 委 員 強いて言えば、地球環境との共生系のものがあつたほうが良い。脱炭素は、政策という意味では目前だが、自然環境とどう共存していくのかというのが理念に入っていないと、何年か先には抜けていたということになるような気がする。

南雲委員 分野横断や全体最適は方法論なので、視点に入れても良いのではないか。

沼尾委員 「5つの重視する視点」の「多様な主体との連携」の主語は行政か。

スマートシティ推進課長 行政だけでなく、様々な主体が関わり合うという意味合いで考えている。

沼尾委員 多様な主体が参加、連携するということであれば表現を変えた方が良い

スマートシティ推進課長 検討したい。

森川部会長 3つの原則の「課題解決・価値創造」、「分野横断・全体最適」はあまり情報量がない。「課題解決・価値創造」のところも、もう少し何か言えると良い。

スマートシティ推進課長 前回、骨子案のときには8つでめり張りがなく、それを3つの原則とした。国が策定した「スマートシティ・ガイドブック」の中でも、この3つの要素が基本理念として掲げられていたので、千葉市が考えていたものと一致しており、再整理した。この3つの言葉がスマートシティの重要なキーワードになると考えている。

越塚副部会長 3つの原則でこれだけを書くと森川部会長のご指摘のような印象を持つが、「～ではなく、～」と考えると納得感が出てくる。「市民中心」についても、「行政やベンダー中心ではなく市民中心」、「課題解決」についても、「経済最優先やソリューションの一方的な提供ではなく課題解決」というようにすると、今までの従来のこういうもの乗り越えて、こっち側に行こうというのが見える。

高梨委員 千葉市を愛する市民が自発的に活動でき、心身ともに健康で過ごせるまちになっていくと良い。これまで他の委員の皆さまのご意見をお聞きし、大変勉強させていただいた。これからは考え方を変えていく必要があると感じた。

森川部会長 南雲委員や越塚委員にお聞きしたいが、他都市で市民をうまく巻き込んでいる事例はあるか。

南雲委員 全部をうまくやっている都市はなかなかない。柏の葉はアーバンデザインセンターをやっている。会津若松はちょっと特別な事例だが、「AiCT」というコミュニティセンターのようなビルを造っている、一つ一つ見ていくと、少しずついいアイデアを拾い上げていくプロセスができるかもしれない。

越塚副部会長 札幌や福岡は地元愛が強く、産業界そのものも地場で地元を支えようみたいなのがあがるが、関東だとあんまりこういう感じはない。

沼尾委員 民生委員や児童委員などの社会保障の専門職員、あるいは地元の商店街とアナログなネットワークをどのように作りながら見守り合い、支え合いの仕組みをつくるかということだが、情報を共有するところで個人情報への壁がある。そこにICTの技術やノウハウが入ることで、個人情報が適切な形で使えるようになると、もっと快適な見守りとか支え合いの仕組みができるだろうと思う。一方、福祉などに関わっている方は、ICTのリテラシーのところは必ずしも強くない。そういうところを鍛えていったり学んだりして、データの活用を図りながら、どういう仕組みを作るかということと組み合わせた検討を本当はしていかなければならないが、そこができていない。福祉について、このスマートシティというところで何かやってほしい。特に教育も、学校は情報もクローズになっているので、どうやってオープンにするのかが見えてくると良いと思う。

南雲委員 アーバンデザインセンターは、みんなデジタルじゃないところから始まっている。例えば埼玉の美園は人口が増えていて、0歳児の数が人口ピラミッドで一番多い。そうすると、まちづくり度のトーンが非常に強くなってくる。アーバンデザインセンターは、景観に合わせアーバンと言うところが多いが、アーバンデザインセンター系のと

越塚副会長 ころはまちづくりをやっている人たちはいっぱいいる。
アウトプットの仕方として、例えばこれから社会を担う若い人に見てもらうときに、ネットに文章があって、それをダウンロードしてPDFを見るかというとな誰も見ない。発信の仕方をスマートにしたほうが良い。

議題（3）その他

スマートシティ推進課長 本日は大変貴重な御意見をいただき、感謝申し上げます。次回は6月21日を予定しているので、引き続き、よろしくお願いしたい。

森川部長 皆さまより多角的な御意見をいただき、感謝申し上げます。今後もよろしくお願いしたい。

—閉会—